# 日本山岳会 越後支部報

**第 35 号**
令和４年10月15日
発　行　公益社団法人日本山岳会越後支部
発行者　桐生 恒治
新潟県見附市学校町１－９－19
TEL･FAX 0258－62－0148
広報委員長　佐藤 高晴

## 私の一枚

佐藤一栄さんと峡彩山岳会の歴代会長の皆様との山行の時です。佐藤さんから藤島玄さんを紹介いただき日本山岳会への入会となりました。多くの岳人との豊かな交流を進めて頂きたい、とのお願いでありました。この写真は両津加茂口から金北山への登山途中でスノーホテル（雪洞）に泊り、翌日金北山からスカイラインに沿って相川へ歩いた時のものです。このことは、「岳神11号」昭和47年（1972年）発行の中で「大佐渡山脈縦走」として斎藤平七さんが掲載しています。歴代会長後列左より佐藤さん山岸さん斎藤さん前列井口さんです。

**藤井与嗣明**

## 高頭祭と弥彦山たいまつ登山祭を通常開催
### ～寿像修復事業完了と実施内容～

支部長　桐生　恒治

世界的なパンデミックとなったコロナ禍で、過去2年以上も活動自粛を強いられました。高頭祭は縮小開催とし、同時開催の弥彦山たいまつ登山祭は中止を余儀なくされました。今年度当初は終息状態かと思いましたが、7月からコロナ第7波が急激に感染拡大して来ました。しかし、人類の知恵と経験で予防ワクチン接種の普及や感染防止対策が確立し、人流規制もなく各種行事も徐々に再開されたことから、3年振りに通常開催することができました。

7月25日の第65回高頭祭は、梅雨明けが例年より1ヶ月も早いため、戻り梅雨的な雨模様が直前まで続きましたが、雨天中止のない高頭祭のジンクスで好天に恵まれました。東京本部から古野淳会長・橋本しをり副会長・柏澄子常務理事の執行部、小林政志前会長・日向祥剛北九州支部長、込田伸夫神奈川支部長の他、神崎忠男元副会長主宰のアルピニズムクラブ同好会約30余名が越後集会として参加、越後支部会員も多数出席し盛大な行事になりました。

過去の高頭祭は、お祓いや玉串奉奠など神前式でしたが、昨年の高頭祭から、参加者全員で寿像に献花して翁を偲び顕彰するスタイルとし、お酒を好んだ翁のレリーフに女性陣から献酒のセレモニーを行いました。特に今回は高頭翁の功績紹介と寿像建立の経緯を説明した看板を、寿像近くに新規設置して除幕式を行いました。高頭祭終了後に古野会長から、「高頭仁兵衛と日本山岳会」と題して記念講演していただきましたが、日本山岳会創設時から、地方出身の高頭翁が東京で会務に従事しており、更に莫大な金銭的支援で財務基盤を確立するなど、その尽力・財力で今日の日本山岳会に発展してきたとの歴史を述べられました。

高頭祭終了後、参加者は大平園地から弥彦本山奥の院に向かい、新潟県登山祭で安全登山祈願祭に参加しました。夕刻より奥の院から御神火のたいまつを掲げながら、麓の弥彦神社に向かいました。宮司様からご挨拶をいただいた後、地元児童鼓笛隊先導で参道から市中へ繰り出し、打ち上げ花火の舞う幻想的な雰囲気の中を、粛々として行進を行い終了しました。

一昨年12月の支部役員会で「高頭仁兵衛翁寿像碑修復実行委員会」を立ち上げ、募金活動で総額１５５万８千円の募金が集まりましたが、その実施事業内容は次の通りです。①高頭仁兵衛翁寿像の全面リニューアル修復工事、②大平園地登山口に「高頭仁兵衛翁寿像」のステンレス製案内看板新設、③大平園地登山口の既設案内看板地図を「日本山岳会高頭仁兵衛翁寿像」と追記した新版地図に張替、④高頭翁紹介と寿像説明看板の新設、を実施しました。機会を見つけて現地を訪れて、新装寿像や新設看板を見学していただければと思います。

## 地域の山

# 大毛無山（おおげなしやま）（1429m）

春日　良樹

大毛無山は、上越の青田難波山（949m）～火打山（2462m）に連なる頸城山塊の中程に位置する。第三紀中新世、海底に堆積した砂泥互層が隆起してできた山である。サメの歯、ニシンの骨や鱗、褐藻類、木の葉などの化石や北陸随一と称される海底の砂に残されたさざ波の化石「漣痕（れんこん）」も産出する。

日本海に隣接し冬の季節風が直撃するため、山稜は10mを超える豪雪に見舞われる。そのため、1500mに満たない低山ながら、谷筋には7月末まで雪渓が残り、ニッコウキスゲ、ミズバショウ、ザゼンソウ、サンカヨウ、マイヅルソウ、オオサクラソウ、コキンレイカ、ツバメオモト、シラネアオイ、ヒメシャガ、タケシマラン、モウセンゴケなど、亜高山や高山の植物が豊富で、花の大毛無山と呼ばれる所以である。

山名は、昔から里山の薪炭林として伐採され大木が無いことから、「大きな木無し」に由来すると言われてきた。しかし、南北朝時代までは戸隠・飯綱・妙高山とともに熊野修験の影響下にあったと考えられ、「おほけなし＝恐れ多いほど尊い山」の意が妥当である。

登山口は、ロッテアライリゾートから続く林道大毛無線の終点。8台ほど駐車可能。通称「堀割」と呼ばれる眺望のよい峠に向かって林道を50m登ると左手に登山道の案内看板がある。標高は1064m。山頂までは、水平距離2・2㎞、標高差365m、1時間30分～2時間の道程。「矢代の自然を活かす会」の皆さんが整備を継続しているため、しっかりとした登山道である。登山口から15分ほどの急登で、尾根に出る。ブナ再生林の林床に、ツバメオモトやツルアリドオシの小花を愛でつつ10分ほど平坦な尾根道を歩けば、サラサドウダンツツジが生えるシナノキ坂の登りが待っている。炭焼き索道跡地やスキー場リフト終点で景色を楽しみながら進むと大嶺の谷地に着く。ザゼンソウとミズバショウが咲く小さな湿原で標高は約1250m。小さな水溜まりがあり、殻長5㎜ほどの微小な二枚貝ニホンマメシジミが生息する。ここから山頂までは、30～40分程度。途中、休み場の清水が湧き出している。水量は少ないが冷水が枯れることは無く、登山者の喉を潤してくれる。この場所には遅くまで雪渓が残ることがあり、滑落しないよう注意が必要である。ニッコウキスゲやヒメシャガが散在する斜面を登り残雪が残る前山を通過すると、山頂は目前である。山頂では、妙高戸隠連山国立公園の妙高・火打・焼山、西頸城の権現・鉾ヶ岳、海谷山系の烏帽子岳・阿弥陀山などの山々が大パノラマで迎えてくれるに違いない。

大毛無山の登山適期は、林道大毛無線の雪が溶け、シラネアオイが咲く6月末～7月中旬がよいだろう。詳しい登山情報は、矢代の自然を活かす会のHPで得るとよい。登山道の整備状況や花などの情報が満載である（検索＝大毛無山・登山情報）。

## 猪熊隆之氏の「山岳気象セミナー」講演会とフィールド講習を開催

大場　勲

**【講演会】**

（日時）
令和4年6月4日（土）午後1時30分～
（会場）黒埼市民会館
（参加者数）約90名
県内山岳関係者が多数参加しました。

◎猪熊隆之氏について
新潟県出身の山岳専門の気象予報士
国立登山研修所の講師、専門調査員
2011年（平成23年）に日本初となる山岳専門の気象会社ヤマテンを設立。

◎気象遭難TOP4
1　低体温症
2　落雷
3　沢の増水
4　突風による転滑落

◎気象遭難を防ぐには
1　登山前日に天気図確認
・一般の天気予報は地上用であり、山には山の天気がある事を理解する。
・起床後、すぐに空を確認（早朝から雲のやる気をチェック）
2　登山中に雲や風を確認
・開けた現場に着いたら、出来るだけ風上側の空を観察し風を感じる。
・小屋到着後、直ぐに気圧を読み翌日の朝と比較して気圧の動きを把握する。

**Ⅰ　山の天気の基本**
・天気が崩れるのは雲ができるから
・上昇流が起きる場所
・地上天気図から風を読む時に重要なのは
・雲の種類と風との関係
・山岳の気象特性

**Ⅱ　もっとも怖い気象遭難**
・低体温症とは
・低体温症を防ぐには、衣服のスリングをしっかり締める等の防風対策と風速1m／sで体温1度程度の低下を見込むこと。
・引き返しポイントとは

**Ⅲ　落雷と局地豪雨から身を守る**
・落雷と局地豪雨をもたらすのは積乱雲
・雷被害を防ぐために、絶対近付いては

いけない場所（尖った山頂、突き出た岩、高い木、岩場等滑落の危険がある場所）を知る。
・登山中は観天望気（雲の動きや風向、強さ、湿り気を感じながら、経験をもとに天気を予想する）
・どこに避難すべきか

**Ⅳ　気象遭難を防ぐための方法**

・計画段階でリスクを想定
・引き返しポイントを決める
・タイムリミットを決める
・霧に覆われそうな時の避難のタイミングは、冷たい風と生暖かい風が交互に吹き始める時など。

**【フィールド講習】**

（日時）令和4年6月5日（日）午前
（会場）古津八幡山遺跡（新潟市秋葉区）
（参加者数）20名

今回のフィールド講習会場の古津八幡山古墳は、古代の円墳が往時の姿に復元整備されたものです。一般にはあまり知られていないと思いますが、手入れが行き届いた古墳頂部に立つと展望が効き、雲観察の適地でした。

当日は天候にも恵まれ、多種多様の雲がそこここに出現。その都度、猪熊氏に解説して頂きながら観察しました。普段、さほど気にすることの無い雲について考える良い機会となりました。

## 第5回子ども登山教室の中止…これからの事業展開に繋ごう！

自然保護委員会　鷺本　修一

支部の新事業として立ち上げた「山の日」の子ども登山教室。糸魚川市で計画した5ケ年計画が終了となった。第1回から3回までは順調に進んだが、4～5回と新型コロナウイルスの影響を受け、中止を余儀なくされて残念無念の感が残っている。

手元に、3回目までの「活動記録集」がある。その都度、実行委員会を開催して検討し、計画・準備・実践・総括した内容がまとめてある。今後に活きる貴重な資料だ。次年度からは、糸魚川の取組をベースにして、他地域での開催に広げていくことが支部の課題である。子どもたちが見せた自然観察や山頂での輝く瞳を心の糧にして、仲間との協働による新たな取組に繋ぎたい。

## 高頭寿像碑説明看板除幕式報告

小山　一夫

高頭祭終了後、寿像碑説明看板の除幕式が古野淳会長、北九州支部・日向支部長、桐生支部長、後藤副支部長が参加して行われました。寿像碑には武田久吉氏の寿像銘文があるが、風雪で読めない状態です。

高頭碑は大平園地の見晴らしの良い場所にあり家族連れの格好な休憩場所になっています。昨年、寿像碑修復事業に皆様のご協力で多額の浄財を頂き修復事業も終わりましたが、残金が有り高頭碑の案内板を作成することになりました。高頭仁兵衛翁の功績を、多くの登山者や観光客に伝えることが出来ることになりました。寿像碑周辺を含め修復事業が完了することが出来ました。ご協力に感謝いたします。ありがとうございました。

## 弥彦山環境整備活動、草刈りと清掃活動報告

小野寺　昭彦

・日時：令和4年7月25日（月）
　9時～12時
・場所：弥彦山山頂から大平園地周辺
・参加人数：21名

**【目的】**

今年は大きく2点の課題を持ち草刈り等を行うこととしました。

①第65回高頭祭の一環として、新設した高頭翁寿像の紹介看板の除幕式を実施することから、特に多くの参加者の来場が見込まれる大平園地までの階段周辺を重点的に行う。

②近年外来種（フランスギクやオオキンケイギク等）の成長が著しく、山頂奥の院付近では刈払い後の経過観察も視野に入れ行う。

**【実施】**

活動は2班に分け、1班は大平園地登り口周辺～階段両脇～大平園地まで。2班は大平園地登り口～9合目～弥彦山山頂（奥の院）まで。開会のあいさつでは日本山岳会越後副支部長後藤正弘が清掃活動への参加に対し感謝の意を伝え、事務局から本日の作業内容を説明した後、それぞれの班ごとで詳細な打合せ、そして本格作業に入りました。1班の大平園地までの階段両脇は人が交差できないほど雑草が繁茂し3台の草刈り機が大活躍、また2班も奥の院では1台きりの草刈り機が休みなく稼働し続けました。

**【外来種について】**

近年、ヨーロッパ原産のフランスギクが道端でよく見かけられ、この弥彦山においても大平園地や山頂付近で目立つようになりました。今回の草刈りでは弥彦村産業部観光商工課と調整を図りながら、以下の対応方針を決めています。

①刈り取った草はできる限り袋詰めする。
②山頂奥の院の鳥居付近はフランスギクを根こそぎ取りその後経過を観察する。
③袋詰めしたフランスギク等は弥彦村が処分する。

**【活動を終えて】**

作業は猛暑の中、また、新型コロナ感染症対策にも気をつかいながら12時無事終了しました。参加して下さった皆様ご協力いただき感謝いたします。

## アルプスと海をつなぐ「梅海新道」開通50周年記念登山
# 朝日岳・犬ケ岳・白鳥山縦走

山行委員長　渡辺　茂

日　時：２０２２年８月４日（木）～７日（日）

メンバー：渡辺 茂、後藤 正弘、遠藤 俊一、井口 光利、佐藤 博、君 清、井口 礼子

５日は５時前に、本会会員鬮本氏所有の岳修山荘を親不知観光ホテル駐車場に向け出発。駐車場にて予約しておいたジャンボタクシーに乗り込み登山口の北又小屋に７時前に到着。朝食後、北又川にかかる吊り橋を渡りイブリ尾根に取り付く。標高７００m前後と涼しいが、原生林の急坂に汗を流しながらイブリ山への各『山頂標識』を目指す。５合目に水場の案内看板があり３分ほど行くと水場があった。11時半にイブリ山に到着。クサリのある岩場を過ぎるとようやく木道の斜面や両脇に花々が咲き、さらに進むと夕日ケ原に出た。夕日ケ原からは草原地帯、チングルマやムシトリスミレなど様々な花を観ることができた。ここから緩やかな斜面を上ると木道の先に赤い屋根の朝日小屋と残雪、木道のコントラストの景色が疲れを忘れさせる。

６日は朝日小屋５時半に出発、途中には花々が咲き、背後には劔岳、大日岳、毛勝三山を見ることが出来た。山頂から「吹上のコル」までが雪田がある花街道となり多種多様な花々が咲き誇っていた。樹林帯を下ると、眼下には桃源郷といわれるアヤメ平であり、木道沿いにヒオウギアヤメが名残惜しそうに咲いていた。またまた樹林帯を抜け急斜面を降り小川を渡るとベンチのある黒岩平であった。付近にリュウキンカやチングルマが咲いていたが昔の記憶とは違った景色となっていた。梅海新道は真に花々が咲き誇る天空の楽園である。

７日、今日も晴れ、スタートは長い下りで少し登ると狭い平坦な黄連山となり、菊石山直下の水場まで進むと涼風が吹き抜けると気持ちの良いブナ林に休憩地があった。ここからアップダウンを繰り返し登りきると菊石山の山頂であった。いよいよ最後の急登を登ると下駒ヶ岳、白鳥山に到着。あとは下るのみ、シキ割りの水場で昼食とし急坂を慎重に降りると坂田峠に出た。ここから尻高山、二本松峠を経て入道山を越えて親不知観光ホテルに到着、さらに５分ほど階段を降りると日本海であった。今まで深い山の中を歩き、目の前の海にたどり着くと今回計画した梅海新道を完歩した実感が湧いてきた。

古道調査

## 新緑の美しい「塩の道」を日本海から
# 中山峠越え、大網峠越え

後藤　正弘

○２０２２年５月14日（土）雨のち曇り　日本海から中山峠越え　９名
○２０２２年５月15日（日）晴れ　根知から大網峠越え　11名

「塩の道」とは、糸魚川市から信州松本まで延びる約１２０㎞の松本街道のことだ。信濃では糸魚川街道、千国街道とも呼ばれる。日本海側から塩荷や海産物がボッカや牛の背によって運ばれ、庶民の暮らしを支えた。

14日は雨模様のなか日本海の起点を出発、市街地から縄文遺跡のある美山公園の

丘陵地を越えて大野に入る。大野地区から中山峠を越えて仁王堂そして根知駅まで踏査した。「ウトウ」と呼ばれるU字状の道跡や石仏群、茶屋跡など遺構が残り往時を思い浮かべた。山行後、山口の「塩の道資料館」で職員の熱心な説明を受けた。泊りは「岳修山荘」で交流を深めた。

翌日は根知（小学校）から山口地区へ入り、関所跡から山岳地帯の白池、大網峠そして大網宿へと踏査を進めた。残雪も多く素晴らしい自然の中で気持ちよく歩くことができた。それにしても大網峠から大網宿まで、悪路の連続でボッカの苦労がしのばれる。

古道調査

## 米沢街道

渡邊　忠次

米沢街道十三峠（鷹ノ巣・榎・大里峠）昨年秋の会津街道諏訪峠の古道調査に続いて、越後と米沢を結んでいた米沢街道十三峠のうちの新潟県側、鷹ノ巣峠、榎峠（戊辰戦争激戦地）、大里峠（大蛇伝説の地）を今年6月12日に調査したので報告する。当初は山形側も検討したが日程的に無理があることから越後側の三峠を実施した。

米沢街道十三峠は１５２１年（大永元年）伊達14代稙宗（たねむね・政宗の曽祖父）により大里峠が開かれたのが始まりで、江戸時代にかけて順次整備され、その後、上杉藩により宿駅、伝馬制度が整うと街道の重要性がますます高まっていった。１８８５年（明治18年）小国新道（旧一般国道１１３号）が開通してから十三峠の役割は徐々に終わりを迎えた。

過去にはイザベラ・バード、良寛、原敬、十辺舎一九、伊達政宗など多くの著名人が往来したこの街道を越後支部会員20名が踏破した。参加者は32歳から88歳までの平均年齢70歳ではあるが、まだまだ現役のツワモノばかりである。関川村の道の駅に隣接するゆーむ駐車場８時集合出発した。鷹ノ巣峠入口の下川口集落で開会式後鷹ノ巣峠、榎峠を越えて大里峠入口の清水が湧き出る小広場で昼食をとる。出発時から曇り空で雨が心配されたことから、早めはやめの行動となり大里峠の県境を越えて山形県小国町玉川集落に午後３時30分頃到着した。迎えのために早朝に配置していたデポ車４台に分乗して出発点に戻り閉会式後解散した。

この古道調査の計画から実施まで支部の皆様から的確な指導助言をいただいた。

また地元関川村山の会会長始め会員に参加協力をいただき無事終了したことを報告するとともに皆様に感謝と御礼を申し上げる。

最後に、十三峠と言えば「黒沢峠」のブナやナラ林の中の３６００段の敷石、茶屋跡、一里塚。最大の難所と言われた「宇津峠」が有名であるが、何れも山形県側。今後機会を見て早春、晩秋の十三峠をご堪能ください。

古道調査

## 八十里越

井口　光利

令和４年７月３日早朝５時30分、三条市吉ヶ平山荘前に集合し越後支部会員他23名で八十里越（県境の木ノ根峠まで）を踏査しました。当日は日本山岳会の坂井広志副会長が途中まで同行されました。

この峠道は、古道（江戸時代に使用し、幕末長岡藩一行が越えた旧八十里越）、中道（明治14～27年）、新道（明治28年）と変遷し、現在は新道（一部古道）が残っています。

番屋乗越にて

八十里越は六十里越と並んで、古くから越後と会津を結ぶ生活の道であり、歴史の道でした。八十里越の名称は、道が難を極め一里を平地の十里に例えたとされており、峠越えの道がどれ程険しかったかが伺えます。越後からは塩・魚類を、会津からは繊維原料・人足等、また文化交流の道として明治末期まで往来してきました。総距離は32㎞、休憩を含まず約10時間の行程でした。

この度の踏査は、吉ケ平から県境の木ノ根峠を目指しましたが、随所にある沢の横断や途中降雨にあったり等で予定が遅れ気味となり、木ノ根峠まで後１㎞手前でタイムアウトとなり、大白川林道を経由してマイクロバスの待つゲートまで12時間の行程でした。

参加者の皆様のご協力により、無事当初の目的を達成する事が出来ました。

古道調査

## 金北山～檀特山～金剛山の三山駆け

藤井　与嗣明

金北山から檀特山、金剛山を「佐渡三山」と称し、男子三歳或は五歳になると父親は親戚の人（親の兄弟や血筋の濃い男性）を頼んで、「三山駆け」の風習が昭和の初め頃まで盛んにおこなわれた。古くからおこなわれたこれらの「三山駆け」を山岳古道としてお願いするものです。

今回の調査において、金北山へは多くのルートがあり、古く里宮のあったとされる麓、新保集落からの栗ヶ沢からとさせていただきました。

7月27日、林道終点の栗ヶ沢をスタート。ルートの祓川は、昔日の人はこの水場で手を洗い、汗を拭いて喉を潤し、身体を清めて山頂へ向かう。金北山からドンデン山での古道の面影は、役ノ行者堂跡に2体の石仏や風化した道標が見られる程度である。

28日、前夜から明け方にかけての大雨も止み、霧が濃い。朝霧は晴天の知らせだ。

尻立山からは昨日の金北山、今日の金剛山が遥かに望まれる。展望が良いのは、ドンデン山と金剛山で、杉を主体とした樹林帯を歩くことになる。私は腰痛から、摂生に務めてきましたが比較的なれた佐渡の山でも、長いルートから痛さが再発し、途中リタイヤとなったことが悔やまれる。

## 古道調査山行のご案内
## 魚沼江戸古道「銀の道」を歩く

松井　潤次

今から三百余年前の江戸時代初め、奥只見銀山平で銀鉱が発見されて以来、閉山されるまでの２００年間、銀運び出しの道として往時、賑わい栄えた枝折峠の旧道が「銀の道」です。

魚沼市駒の湯から標高差９００ｍ約８㎞の登りで明神峠を越え、標高差４５０ｍ約４㎞を銀山平石抱橋まで下る全長12㎞のトレッキングコースです。

落葉が始まる晩秋に、道中の目安とした一服場跡に往時を思い馳せ歩きましょう。

1. 期日　２０２２年11月３日（木）
2. 集合　参加申込者に後日連絡します。
3. ルート　駒の湯～明神峠～石抱橋
（歩行時間：約５時間）
4. 参加対象　日本山岳会越後支部会員で山岳保険加入者とします。
5. 参加募集人員　20名程度
6. 参加費　２０００円程度（交通費）
下山口からバスにて出発地に戻ります。
7. 参加申込　〒９４７－００４２
小千谷市平沢２－６－26松井潤次宛
ＦＡＸ：0258-83-4861
携　帯：090-4621-1825
e-mail：mahojiya@seagreen.ocn.ne.jp
8. 申込締切日：10月23日（日）

※住所・氏名・生年月日・年齢・携帯・緊急連絡先をお知らせください。

## 「平日トレッキング」案内

小山　一夫

新型コロナウィルス感染症の拡大で「公募登山・平日トレッキング」を中止してきましたが、行動制限もなくなったことから少数開催で再開することとしました。

感染症の再拡大や最近の状況から参加者が少ないことが予想されますので、広報活動を強化したいと思っております。皆様のご協力お願いします。

○10月27日　会津の「須刈岳・大仏山」
○11月９日　「番屋山」

詳細は以下の連絡先へお問い合わせください。

携帯：090-5219-7432
e-mail: koyama21825@yahoo.co.jp

## 越後支部年次晩餐会を開催予定

コロナ禍で過去2年間中止しておりましたが、今年度越後支部年次晩餐会を12月10日（土）に新潟東映ホテルで開催する予定です。十分なコロナ感染防止対策を行いますが、参加者はできるだけワクチン接種を済ませていただくなど対応をお願いします。

## 事務局からのお知らせ

**●支部会員動向（２０２２年４月～８月）**

1　新入会員
高畑　悦武（１６９４１）
君　　清（１６９７８）
那須　昭裕（Ａ０４６０）

2　準会員
3　新会友
猪熊　隆之（１４７４４・所属支部なし）
川島万里子（１６７６０・山梨支部所属）

4　退会者
斎藤　桃子（Ａ０３７４）
中原　剛（１２０４６）

5　物故会員
白井丑太郎（７６４８）
山田　一介（４３４８）

**●支部会員総数（２０２２年８月末現在）**

支部会員（準会員含む）１６１名
支部会友７名

**お詫び**

前号の朝日連峰の案内において、「申込締め切」を誤って、「栂海新道」の案内と同じ、としてしまいました。関係する皆様に大変ご迷惑をおかけしてしまいました。謹んでお詫びいたします。

## 編集後記

7月25日の弥彦山環境整備活動では、大平園地西側の階段周辺で外来種のフランスギク駆除作業を担当しました。取りこぼしがないように根から抜き取り、全て袋に詰めましたが、今後の推移を見守りたいと思います。

コロナ感染はまだまだ収まりそうにありませんが、感染対策を行い、山行も増えてきました。行事や、山行の報告、案内など、支部報作成に協力してくださいました皆様に、心より感謝いたします。（佐藤高晴）